

## 旧東ドイツ歴史学の変貌

加 来 浩

はじめに

一九八九年十月／十一月の「転換」(Wende)後、旧東ドイツ(ドイツ民主共和国、略称DDR)は急激な政治的・経済的・社会的変化の中にある。旧DDRが現在かかえる最大の社会問題は失業である。労働者のみならず、軍人や警察官を含む官僚ないし国家・地方公務員の相当部分がこれまでの職を失う危険に直面している。失業者の数は猶予期限の切れる今年(一九九一年)夏頃には数百万に達すると予想されている。こうした中で大学やその他の研究機関の研究者や小学校・中等学校の教員など、教育・研究に携わってきた人々についてはマスコミで比較的地味な扱いしか受けていないが、彼らの間でも失業の危険が現実のものとなっていることに変わりはない。失業の問題は、研究者では人文・社会科学系の研究者、教員では社会科やロシア語の教員の間で深刻である。彼らの多くは、統一ドイツで職を見出すために、再教育や厳しい審査を受けねばならない。歴史学者の状況はその中でも最も厳しい。旧DDRの歴史家はこれまで、政権政党であった社会主義統一党(SED、現民主社会

党PDS)の支配を正当化するという任務を負わされてきた。東ドイツ国家とSEDに対する否定は、彼らのこれまでの活動の否定を意味する。歴史家たちは自分たちのこれまでの営みと、歴史学の将来のあるべき姿についてどのように考え、あるいは自己批判しているか、それが歴史叙述にどのように現れているか。本稿では、旧東ドイツの歴史学が「転換」そして「ドイツ統一」を経てどのように変化しつつあるかを、二つの歴史学専門雑誌『歴史学雑誌』(Z f G)と『労働者運動史論集』(B z G)を主な材料にして追跡する。その際ドイツ史全般ではなく、筆者が専門とする二〇世紀、特に社会主義・労働者運動史に限定することをあらかじめお断りしておきたい。<sup>(1)</sup>

(1) 本稿は一九九〇年十月七日の東北史学会大会(於東北大学)での報告に加筆したものである。旧東ドイツの歴史学の「危機」について邦語文献では、木戸衛一「ドイツ民主共和国における歴史学の危機と『過去の克服』」『歴史評論』四八四号、一九九〇年八月、一七一―一八頁、がある。

## 一、「転換」後の組織の変化

歴史学に限らず、一般に旧DDRの研究機関で「転換」直後から現れた変化は、①研究者のほとんどがSEDないしその後継政党PDSを離党し、「無党派」になったこと、②機関の名称変更が行われたこと、である。例えば、「国家論・法理論研究所」が「法学研究所」に、ベルリン・フンボルト大学の講座「社会主義理論」が「学際的文明研究」に。旧SEDの付属研究機関では、マルクス・レーニン主義研究所が労働者運動史研究所、など<sup>(1)</sup>。

歴史学者の組織については、歴史学評議会 (Rat für Geschichtswissenschaft) 一九六九年創設) が一九八九年十二月五日に解散され、歴史家協会 (Historikergesellschaft) の幹部会の人事異動が行われた。<sup>(2)</sup> 歴史学の専門雑誌の編集部構成にはあまり変化が見られない。『歴史学雑誌』(Z f G、月刊)では一九九〇年の第12号まで編集会議 (Redaktionskollegium) は一九八九年十月以前と全く同じ29名の構成であった。編集長は一九六四年以来ベッカー-Gerhard Beckerのままである。しかし、一九九〇年九月一三日に編集会議は解散し、従来副編集長であったフォイクト Wolfgang Voigt が一九九一年の第1号から仮編集長 (amt. Chefredakteur) の肩書で、ただ一人の編集委員として名前が記されている。<sup>(3)</sup>

『労働者運動史論集』(B z G、隔月刊)では、副編集長がキースリンク Wolfgang Kießling からハインツ Helmut Heinz に替わり、その他「D

DR 歴史叙述の法王」<sup>(4)</sup> のディール Ernst Diehl ら5人が編集会議から退いて、編集会議そのものが縮小されたが、新たに編集会議入りしたのはハインツだけである。編集長はツィンマーマン Fritz Zimmermann のままである。B z Gでは一九九〇年の第1号からそれまでの「編集・ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所」という記載が消え、第2号からは「万国のプロレタリア団結せよ」も消えた。代わって第4号から「編集・労働者運動史研究所」と記載されている。

雑誌の装丁は大きく変わった。「歴史学の刷新」を読者に印象づけるためであろう。B z Gは一九九〇年の第4号から、表紙がそれまでの赤一色から明るい灰緑色(＋虹の模様)に変わった。Z f Gは一九九一年の第1号から表紙・活字を一新した。雑誌の値段は、一九九〇年七月一日の通貨統合と政府の補助金打ち切りのために、Z f Gは第7号からそれまでの3マルクから13マルク50に、一九九一年の第1号からは更に14マルク50に値上げされた。B z Gは一九九〇年の第5号からそれまでの2マルクから4マルク80になった。B z Gの方が値下げ幅が小さいのは、労働者運動史研究所がPDSから資金援助を受けられるためであろう。

この他、雑誌「歴史教育と公民」Geschichtsunterricht und Staatsbürgerkunde は「歴史と社会科」Geschichte und Gesellschaftskunde に名称変更し、編集長と副編集長が入れ代わった。<sup>(5)</sup>

このように歴史学の組織構造や人員構成はある程度変化しつつあるが、人的連続性に変化がない限り、旧東ドイツ歴史学の「過去の克服」は決して容易でないことが想像される。一九九〇年四月二二日に若手の歴史家たちは「独立歴史家協会」(Unabhängiger Historikerverband)

を結成した。彼らによれば、これまでDDR歴史学を指導してきた人々は信用を失っている。西側で開かれる学会や西側歴史家との交流のため外国出張、文書館史料の利用などは、歴史家の中の一部の特権的階層にのみ許されていた<sup>(6)</sup>と。もちろん統一後はこのような状況はなくなつたものの、若手の歴史家にいかに活動の場を提供できるかは、旧東ドイツ歴史学が生き残るための試金石となるだろう。

(1) Die DDR-Akademie der Wissenschaft kämpft um das Überleben, in: *Der Spiegel*, Nr.30/1990, S.136-141; Ein Institut stellt sich vor. Interview, in: *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*(BzG), 2/1990, S.147-152; 中野徹三「東ドイツ知識人からの手紙」『季刊・窓』第3号、一九九〇年三月、一四一―一八頁。「労働者運動史研究所」はPDSの党幹部会(Parteivorstand)付属の研究機関である。PDSの指導部はSED時代の「中央委員会」Zentralkomiteeではなく、ドイツ社会民主党(SPD)と同じ「党幹部会」の名称を採用している。

(2) Notizen aus dem wissenschaftlichen Leben, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*(ZfG), 4/1990, S.342.

(3) In eigener Sache, in: *ZfG*, 1/1991, S.2.

(4) Hermann Weber, Die DDR-Geschichtswissenschaft im Umbruch? Aufgaben der Historiker bei der Bewältigung der stalinistischen Vergangenheit, in: *Deutschland Archiv*, 7/1990, S.1058-1070.

(5) *Ebenda*, S.1060.

(6) *Ebenda*.

## 二、歴史学の役割についての自己批判

SEDの理論誌『統一』(*Einheit*)一九九〇年初めに廃刊)の一九八九年十二月号は、DDRの歴史学がこれまでSEDの政治的道具の役割を果たしてきたことを初めて認めた。従来の歴史叙述は「大幅に美化され、問題・矛盾・葛藤を除去」されていた、「結論が先にあつて、その望ましい結論が導き出されるように、過程と事実を後から接合させる」のは普通のことであつた<sup>(1)</sup>と。

こうした批判は実は西ドイツの歴史家たちが繰り返し行ってきたものである。もちろん西ドイツの歴史家と言つても多様であり、保守的な歴史家から、DDR歴史家からも進歩的・民主的と肯定的に評価されたヴェーラーHans Ulrich Wehler、ヴィンクラーHeinrich August WinklerらのSPDに近い歴史家までいるが、彼らの間で一致していたのは、DDR歴史学がSED支配の正当化・正統化の機能を果たし、そのためにDDRの歴史、SEDないしKPDの歴史、そして労働者運動の歴史が偽造されていること、学問に必要な複数主義が欠如していること、などの評価である。DDRの歴史家たちは、自分たちは常に歴史の「合法性」に従つて行動していると主張し、西ドイツの歴史家のそうした批判を常に「反共主義」として一蹴してきたのであるが、今やDDRの歴史家が自ら西ドイツの歴史家の批判は正当であつたことを認めたことになる。DDRの歴史家ハイツァーHeinz Heltzerは、一九九〇年二月六

日にケルンで「DDRに関する歴史叙述のラディカルな刷新のために」と題して行った講演の中で次のように述べた。

「政治と歴史叙述の間には緊張関係が存在することを我々は知っていた。しかし実際には学問を政治に、もっと正確に言えば、SED指導部の政治に従属させ、それによって我々の専門分野をこの政治の道具にした。この中心的問題において、西ドイツのDDR研究者が我々に対して繰り返し行ってきた批判は、残念ながらあまりにも正当だった」<sup>(2)</sup>

もちろんDDR歴史学と一口に言っても、古代史・中世史の歴史家と現代史の歴史家とは事情は大いに異なる。政治への従属が問題となるのは、言うまでもなく、後者すなわち現代史、特に戦後史である。ハイツァーは、DDR歴史学が政治に従属した原因について、次のように述べる。

①現代史を専攻した研究者はほとんど例外なくSEDの若手党員であり、現代史に直接関わる党の決定は、厳密に従うべき方針とみなされた。

②歴史家は労働者階級とその指導政党の闘争を支持せねばならないという原則が貫徹した。

その結果として、現代史研究では「...のためのSEDの闘争」という標題をつけたものが非常に多かった。SEDの政策にとって重要でないとみなされた問題、例えば社会の変化、日常生活史、環境保護などは研究テーマになり得なかった。SEDの行動は詳細に叙述されたが、史料の選択は恣意的に行われた。歴史家は、SEDの政策は常に正しいという立場に立ち、これを具体例で証明することだけが歴史家の任務だった。

SEDの決議は、批判的に検討すべき一史料ではなく、決定的な証言とみなされた。しかも党の決議もすべてが引用されるわけではなく、後になって誤りであることが判明した予想、現実との矛盾が顕著になった評価などは、削除され、結果的に成功した決議だけが言及された。歴史叙述において、政治の直接的影響と自己検閲が結合した。「偏見のない、真実にのみ忠実な歴史研究は、このような条件下で貫徹できなかった」

ハイツァーは、DDRの歴史学が政治の道具にならない可能性があったかどうかについて、一九五九年に行われた一つの論争を紹介する。それは、ハイツァーによれば「決定的な分岐点」だった。発端は、ケーラー F.Köhler がドイツ史の教科書「ファシズムの軛からの解放からDDR建国までのドイツ（一九四五—一九四九年）」のために書いた論稿である。ケーラーはDDRの歴史叙述において初めて、公表された史料と、西ドイツの研究も含む当時の研究文献に依拠して、ドイツの戦後史をできるだけ事実 に 忠実に、あらかじめ設定された図式によらずに、叙述しようと試みた。しかしこのケーラーの論稿に対して批判がなされた。批判されたのは、ケーラーが「SEDの認識」を十分に考慮に入れてなかったためである。（ハイツァー自身も一九八七年に至るまでケーラーを厳しく批判していた。）「SEDの認識」とは、DDR建国十周年に当たってのSED中央委員会のテーゼと、書記長ウルブリヒト Walter Ulbricht の著作『ドイツ労働者運動史』(Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Berlin 1955)を指している。この論争の最も重要な結果は、これ以後現代史叙述がSEDの決議に完全に拘束されるようになったことである。

ハイツァーによれば、一九七一年のSED第8回大会（ウルブリヒトに代わってホーネッカーErich Honeckerが書記長に就任、DDRにおける「社会主義的国民」の形成の始まりというテーゼが採択）以後、歴史学に対する政治の直接的な介入は少なくなった。しかし、政治の影響と自己検閲というメカニズムはその後も続いた。マルクス主義の批判的精神はSEDの歴史研究では完全に忘れ去られた。DDRの歴史は、ドイツ史の頂点とみなされ、SEDは、資本主義から社会主義への移行の客観的合法則性の執行者とみなされた。SEDの政策の連続性が絶対化され、それに対して断絶・矛盾・葛藤・危機は、覆い隠された。DDRの進歩や成功はSEDの功績であり、逆に困難な問題は「階級敵」のせいとされた。統一的、自己完結的で、矛盾のない歴史像が以前にも増して要求された。歴史家によって美化され、学校とメディアによって広められたDDRとSEDの歴史像と、人々が実際に経験する日常の現実との乖離がますます大きくなり、ついに一九八九年秋に爆発した。DDRの歴史家は、それに共同責任を負っている、と。

一九八五年のソ連におけるゴルバチョフの登場は、ハイツァーによれば、スターリン主義の遺産との決別と、根本的な刷新の最大かつ最後のチャンスを与えた。ゴルバチョフのペレストロイカ・グラスノスチはSED内部でも支持を得た。しかしホーネッカー指導部は全面的にそれを妨害し、DDRの危機は避けられなくなった。知識人と民衆の同盟が、「下から」「転換」をもたらした、と。

(1) Weber, S.1059.

(2) Heinz Heitzer, Für eine radikale Erneuerung der Ges-

chichts-schreibung über die DDR, in: ZfG, 6/1990, S.498-509. ハイツァーは西ドイツのDDR専門家H・ウェーバーに言わせれば、弁明的な歴史叙述の「聖杯守護者(Graßhüter)」であり、一九九〇年九月第12号)までZfGの編集員でもあった指導的な歴史家の一人である。

### 三、歴史の見直し

BzG編集部は一九九〇年の第1号（編集締切は一九八九年十一月一日、従って「壁」崩壊より前）で、次のような内容の声明を出していた。DDRの革命の変革は労働者運動史への新しい見方を要求している。SEDの信頼喪失の原因は、「決定的な独自の歴史的経験と伝統の軽視」である。それゆえ「党史の批判的分析」と「過去数十年続いている欠陥の是正」、労働者運動史における「概念的再出発」が必要である。特にSEDの歴史についての「矛盾と葛藤のない、成功の叙述の傾向」を克服せねばならない。KPDとSEDにおけるスターリン主義のような、不快で痛ましい事実・問題も、避けて通ってはならない。そのためにBzGは、まず第一に労働者運動史に関する「討論フォーラム」にならねばならない。あらゆる投稿が歓迎される。採用されるかどうかの基準は、その研究の学問的な質である。投稿者は、幅広い史料の基盤に依拠して新しい問題を提起し、いくつかの通説に疑問を投げかけ、独自の立場を鮮明に打ち出すことが求められる。編集部は一九三五／三六年、一九五三年、一九七一年、一九八九年などの歴史的転換点における党の役割についての論文を望む、<sup>(1)</sup>と。

BzGは編集部の声明を一九九〇年の第1号から直ちに実行に移した。BzGに見られる歴史の見直しの具体例を、①スターリン主義の問題、②社会主義・労働者運動史、③SED・DDR史、に分けて紹介する。<sup>(2)</sup>

#### (1) スターリン主義の問題

スターリン主義の問題は、既に一九五六年にフルシチョフによる有名なスターリン批判が行われていたから、DDR歴史学の「刷新」のために最も手をつけやすい問題であった。BzGの第1号では「コミンテルン。再検討の時」「フランツ・ダーレム。後に残されたもの、削除されたもの」の2本が掲載された。前者はソ連のマルクス・レーニン主義研究所の二人の研究員へのインタビューであり、スターリンの恐怖政治とそのコミンテルンへの影響がそのテーマであった。後者は一九五三年に失脚したヴァイマル時代からの共産党指導者ダーレムの回想録（一九七七年出版）の原稿のうち、一九三八年のプハリーンの公開裁判への疑念が表明されていたがゆえに削除された部分を公表したものである。

この他、BzGの第2号から第6号までに掲載されたスターリン主義をテーマにした論文・資料など（スターリン主義の犠牲になった者に関するものが多い）の標題だけを紹介すると次のようになる。後の数字は号数を表す。「ユダヤ人女性共産主義者アーデレ・シフマンの運命」②、「MEGAでスターリン主義に反対」②、「一九三四年のウィリー・ミュンツェンベルク」③、「スターリンの手中のドイツ人反ファシスト」③、「ハンス・キツペンベルガーの人生の同伴者としてモスクワで逮捕されて」③、「ロシュトクの作業部会《スターリン主義の犠牲者》の活動」③、

「マルタ・グロービヒの回想、一九三六／一九三七年。モスクワでの苦難の時代」④、「スターリン主義―概念・歴史・克服」④、「コミンフォルム事務局。回顧」④、「ソ連占領地区／DDR領内のソ連収容所」④、「ポリシェヴィキ化とスターリン主義化は同じか」⑤、「ユーゴスラヴィアと一九四八年」⑤、「トロツキー。スターリンの偽造学派」⑤、「スターリンの重い遺産。ドイツの克服されていない過去」⑤、「ソ連占領地区／DDRのソ連収容所一九四五―一九五〇年」⑥、「一九二〇年代末の《右翼的偏向》に反対するコミンテルンの闘争とその結果」⑥、「特別収容所1及び2における私の体験一九四五―一九五〇年」⑥、「DDR領内における刑事罰の構造」⑥。

BzGに比べて「刷新」が遅れたZfGでは第4号に初めて「スターリンとスターリンの時代について」が載り、第9号に「スターリン主義―概念・歴史・克服」、第10号に「レーニンとスターリン主義」、第11号に《人非人》という苦難の道から歴史的人物へ。プハリーンの、リュイコフ、トロツキー、ジノヴィエフ、カメネフ」が掲載された。<sup>(3)</sup>

しかし旧DDR歴史学におけるスターリン主義の研究は、ようやく端緒についたばかりである。上述のZfG第4号の「スターリンとスターリンの時代について」は、ソ連の歴史家ヴォルゴノフのスターリン伝に対する著名な歴史家W・ルーゲ Wolfgang Rugeの批判的な書評である。しかしルーゲは其中でスターリン主義の定義や、その起源などの問題には正面から取り組んでない。スターリン主義の問題は、一般新聞・雑誌の論文においても盛んに取り上げられているが、そこで目立つのは、スターリンとレーニンを「悪いスターリン―良いレーニン」のように善

玉悪玉的に単純に対比させる傾向である。スターリン主義は「レーニンの原則からの逸脱」によって始まった、と。しかしスターリン主義とレーニンの関係はそれほど単純なものではないだろう。また明確な定義なしに、「スターリン主義」という用語が乱用される傾向も目立ち、その結果内容の乏しい紋切り型になる危険がある。スターリン主義は、ある時は社会主義の「行政的・官僚主義的変形」と解釈され、またある時はスターリンによる「粛清」や個人崇拜に限定される。このようにスターリン主義を狭義に解釈する傾向は強く、広義のスターリン主義、即ちいかなるコントロールも受けないSEDによる権力集中、政治警察による社会全体の支配を特徴とする一つの政治的社会的システム、は問題にされない。またスターリン主義の社会的基盤、即ち三〇万以上のいわゆる「ノーメンクラトゥーラ」階層と、それを支える二三〇万の黨員、翼賛政党と大衆組織の幹部の存在、更に広範な市民の側での自発的な服従、などについても言及されることは少ない<sup>(4)</sup>。

この点で興味深いのは、PDS党首のギジGregor Gysiがスターリン主義の理解において多くの歴史家の評価よりさらに進んでいることである。ギジは一九九〇年五月一六日付け、及び二六／二七日付けのPDS機関紙『新しいドイツ』(Neues Deutschland)で、DDRは「歴史のいかなる時点においても社会主義の質」を持ったことはなく、スターリン主義は「ドイツ人の臣民的精神とそれに類したものによって」強化された<sup>(5)</sup>、と述べた。旧東ドイツの歴史家にとってスターリン主義の研究は、戦後の体制と直接関わるだけに非常に重要な課題である。

(1) In eigener Sache, in: BzG, 1/1990, S.3f.

(2) DDRの政治的变化に素早く反応したBzGに比べ、ZfGの反応は遅かった。例えば一九九〇年の第1号に掲載された「マルクス主義歴史観の基礎としての唯物論と弁証法」という論文は、その標題からしてそれ以前のDDR歴史学との完全な連続性を示している。このことは雑誌の性格の違いにもよるが、また編集縮切の早さも関係している。参照 Ulrich Neuhäuser-Wespy, Zeitschriftenschaue-Geschichte, in: Deutschland Archiv, 1/1990, S.23-28 u. 5/1990, S. 668-672.

(3) 最後のものは一九九〇年初めにベルリンのディーツ出版社(Dietz Verlag Berlin)から出版された小冊子『「人非人」』。彼らは本当はどんな人々だったか』(“Unpersonen.” Wer waren sie wirklich?)の書評であるが、この小冊子で一九八八年にソ連で公式に名誉回復されたブハーリン、ジノヴィエフ、カメネフと並んで、まだ名誉回復されていないトロツキーについても、根本的な学問的研究の上で公正な評価をすべきことを主張している。これは事実上トロツキーの名誉回復を要求していると言えるだろう。この他ディーツ出版社は一九九〇年前半にトロツキーの『スターリンの犯罪』や、アイザック・ドイッチャーの有名なスターリンの伝記『スターリン』などの、これまでDDRでは出版されなかった古典的な著作を出版した。

(4) 参照 Weber, S.1061-1063.

(5) Eberda: DDR建国四〇周年に合わせて出版された『ドイツ史』第9巻『反ファシズム・民主主義的変革、ドイツの分割に反対する闘争』、DDRの成立一九四五—一九四九年』(Deutsche Geschichte in

zweify Binden, Bd.9: Die antifaschistisch-demokratische Umwälzung, der Kampf gegen die Spaltung Deutschlands und die Entstehung der DDR von 1945 bis 1949, Berlin 1989)の編著者であるバートシュテュープナー・Rolf Badstübnerも、DDRにおけるスターリン主義体制の原因の一つとしてDDR市民の「官憲国家的思考・臣民精神の伝統」を指摘する<sup>20</sup>。Die Geschichtsschreibung über die DDR zwischen Krise und Erneuerung, in: BzG, 4/1990, S. 481-491.

## (2) 社会主義・労働者運動史

一九世紀以後の社会主義・労働者運動の歴史については、第一次世界大戦と国際共産主義運動の成立を境に二分されるが、DDR歴史学においてはコミンテルンないし共産党及びそれに直結する潮流のみがいわば「正統派」とされ、その結果、「労働者運動史」と言っても、SEDの前身として事実上共産党(KPD)だけを対象とする党史叙述になり、社会民主党(SPD)を始めとする他の労働者政党・諸党派については、全く無視されるか、KPDの政策の「正しさ」を証明するための批判の対象としてだけ論じられてきた。KPD以外の政党は多かれ少なかれ「反動的」「反共的」であり、資本主義の「手先」「社会的支柱」と評価されてきた。この分野で注目する歴史の見直しは、いわゆる「オーストロ・マルクス主義者」のオットー・バウアーOtto Bauerの再評価に始まる。BzGは一九九〇年の第1号で「二つの世界大戦の間で。オットー・バウアー」、第3号で「社会民主党理論家オットー・バウアーの党理論と

《統合社会主義》の構想」を相次いで掲載した。

第一次大戦前の時期については、SPD議長ベーベルAugust Bebelは以前からDDR歴史学において肯定的に評価されていたが、「転換」後是一九九〇年がベーベル生誕一五〇年に当たるという事情もあって、ベーベルに関する論文・資料が目立って増加した。BzGの一九九〇年の第1号だけでベーベルに関するものが3本(「アウグスト・ベーベルの親友パウル・ズインガー」、「ベーベルの反戦闘争」、「アウグスト・ベーベルとゲルハルト・ハウプトマン」、第3号にも「アウグスト・ベーベル。指導者と集団制」「アウグスト・ベーベル。その生涯と活動」の2本が掲載された。第二インタナショナルに関する論文・資料もふえた。同じくBzGの第1号に「第二インタナショナル・アムステルダム大会とその結果」、「国際社会主義事務局の定期刊行物に見る第二インタナショナル」の2本、第2号に「第二インタナショナル一八八九―一九一四年。その展開の基本問題についてのテーゼ」、第4号に「第二インタナショナルの労働組合」が掲載された。

ヴァイマル期にKPDとSPDの間に位置した様々な党派については既に一九六〇年代に、西ドイツで唯一マルクス主義の立場を取っていたマルブルク大学のアーベントロートWolfgang Abendroth学派が、研究を積み重ねていた。<sup>21</sup>しかし今や旧DDRの歴史家たちの間でもこれらの諸党派の再評価が始まった。

著名な歴史家ペツォルトJoachim Petzoldは、既に一九九〇年一月のSED理論誌「統一」で、一九二八年以後にKPD内で「右派」あるいは「調停派」として批判された人々の再評価を試みていた。<sup>22</sup>ペツォルト



はSPD系の雑誌『新しい社会』の一九九〇年第一号でも同様な再評価を行っている。彼によれば「右派」及び「調停派」は「政治情勢の破壊的な展開への対処を試み」、「コミンテルンの内部で増大しつつあったスターリンの影響力に反対」したために、党を離れ、共産党反対派(KPO)を結成せねばならなかった。KPOは大衆的影響力を持たなかったもので、KPDからは「KPゼロ」と侮蔑されたが、彼らは「反ファシズム闘争において顕著な理論的・実践的貢献」をした、と。ペツォルトは更にKPOと同じ理由で社会民主党から除名されたSPD左派＝社会主義労働者党(SAP)の再評価も行っている。KPD/SEDの公式見解では、SAPはSPDを離れた後、直接KPDに加入しなかったために、激しく非難されていた。つまりSPDの政策に幻滅して、SPDを離れる勢力がKPDに移行するのを妨害した、と。

ペツォルト以外の歴史家も、これまで無視あるいは否定的な評価を受けてきた諸党派を、機関紙『新しいドイツ』で肯定的に再評価した。エンゲルマン Horst Engelmann とナウマン Horts Naumann が U.S.A.D を(一九九〇年三月三十一日/四月一日)、『マトロッシュ Robert Madloch が KPO を(五月五日/六日)、『ニーマンが SAP (五月十二日/十三日) とパウル・レヴィの KAG (五月十九日/二〇日) を。

注目すべきは、名前を挙げた歴史家たちは、これまでこれらの諸党派に対してきわめて否定的な厳しい評価をしていたことである。例えば、ナウマンはUSPDをきわめて否定的に評価し、KAGなどは「反党的」だとされていた。ニーマンは、一九八七年のBzG論文「ヴァイマル共和国末期におけるSAPの成立と役割」でSAPを「KPDの反ファシ

ズム統一戦線の努力」を妨害する党だと述べていた。ところが今では、SAPの失敗、そしてナチスに反対するすべての労働者政党の統一戦線の失敗の原因は、「KPD指導部のヒステリックな敵対」と「スターリン主義のKPDへの影響」である、とまさに評価を一八〇度逆転させている。かつて「党の敵」あるいは「労働者階級の敵」と罵倒した党派を、一足飛びに称賛するという態度、そのあまりの変わり身の早さは、信用できないと言わざるを得ない。

その他、ローザ・ルクセンブルクに対する従来の評価(いわゆる自然発生理論とロシア革命批判)が批判され、伝説化されたテールマン像も批判された。しかしこれらの批判に対しては直ちに『新しいドイツ』で反論がなされた。ヘルマン・ウェーバーによれば、これは「古い思考様式」がいかに根強く残っているかを証明している。スターリン主義研究と同様、社会主義・労働者運動の歴史についても、歴史の見直しはようやく端緒に着いたと言うべきである。

(1) Karl Hermann Tjaden, *Struktur und Funktion der "KPD- Opposition" (KPO)*, Meisenheim am Glan 1964; Werner Link, *Die Geschichtes Internationales Jugend-Bundes "IJB" und des Internationalen Sozialistischen Kampfbundes (ISK)*, Meisenheim am Glan 1964; Hanno Drechsler, *Die Sozialistische Arbeiterpartei Deutschlands (SAPD)*, Meisenheim am Glan 1965.

(2) 参照 Weber, S.1063.

(3) Joachim Petzold, Gedanken eines Historikers zur Erneuerung der SED, in: *Die Neue Gesellschaft*, 1/1990, S.74-77.

(4) 参照 Weber, S.1063.

(5) Ebenda.

### (三) SED・DDR史

今や「歴史」となったDDRとその政権政党SEDの歴史は、既述のように、「スターリン主義」の問題と密接に結びついている。一九八九年にDDR建国四〇周年を記念して『ドイツ史』（全十二巻）のうち一九四五年から一九四九年までを扱った第9巻『反ファシズム民主主義的変革、ドイツの分割に反対する闘争、DDRの成立』が出版された。しかし皮肉なことに、「この本が発行されたまさにその瞬間に、時代遅れになった」<sup>(1)</sup>

戦後旧DDRを支配してきたSEDは、一九四六年四月にSPDとKPDの合同によって生まれた党であるが、旧DDRの歴史家は、この合同が（SPDにとって）強制的な合同であったことを依然として認めてない。前述のペツォルトは、労働者運動の分裂がファシズムを許したという過去の教訓から、KPDとSPDの労働者は統一を強く望んでおり、「強制的統一」ではなかった、と主張している。<sup>(2)</sup> ニーマンもPDS機関紙『新しいドイツ』（一九九〇年三月一〇／一一日）でSPDの大多数が合同に賛成だったと述べている。<sup>(3)</sup> しかし合同についての党员投票は行われなかったし、唯一投票が行われた西ベルリンでは八〇%以上の党员が合同に反対した。<sup>(4)</sup> この事実をどう見るかについては答えてない。とは言え、合同が強制的ではなかったと主張する一方で、SEDの「スターリン化」が旧SPD党员の支持を失わせたことは認める。歴史家エシュヴェーゲ Helmut Eschwege は『ザクセン新聞』（一九九〇年二月九日）

で述べた。「多くの社会民主主義者は一九三三年以後の歴史の教訓から即時合同を望んだ。しかし一九四五年以後の共産主義者の行動は彼らを離反させた。それでもなお党に残った社会民主主義者は、間もなく追放されるか、忠実な追隨者になった」<sup>(5)</sup> バートシュテュープナーもSEDの結成は強制的合同ではなかったと主張するが、「しかしこの早い時点での合同の実施のためにあまりに多くの強制と圧迫、あまりに多くの迫害と逮捕が行われた」ことを認めている。<sup>(6)</sup>

一九五三年六月一七日のいわゆる「ベルリン暴動」について、前述のハイツァーは、一九八九年秋までは「反革命的一揆」と呼んでいたが、今では単に「一九五三年の六月事件」と呼んでいる。しかし「労働者の（正当な）蜂起」とは言っていない。<sup>(7)</sup>

ウルブリヒト時代について言えば、ウルブリヒトに反対して失脚した指導者の、これまで公表されなかった回想が公表されて、ウルブリヒト時代に光が当てられつつある。例えば一九五七年に失脚した元国家保安次官ヴォルウェーバー Ernst Wollweber の回想がBzG第3号に掲載された。またヴァイマル期に共産主義青年同盟（KJVD）議長をつとめ、戦後西ドイツKPDの副議長になりながら、一九五〇年三月に国家保安省（通称Staat）に逮捕されたクルト・ミュラー Kurt Müller について、彼がスターリン批判後の一九五六年に首相グロテヴォール Otto Grotewohl（SPD出身）に宛てた手紙が公表された。<sup>(8)</sup> ミュラーは逮捕後他の東欧諸国と同様の見世物裁判にかけられ、「自白」を強要されて懲役二五年の刑を受けていた。この他多数の無名の「スターリン主義の犠牲者」についても研究が開始された。H・ウェーバーによれば、ホーネッ

カー時代に対する批判のために、逆にそれ以前の時代が美化される危険が存在するがゆえに、ウルブリヒト時代のスターリン主義の解明は一層重要な課題となっている<sup>(9)</sup>。

最後にDDRの四〇年の歴史全般について、ハイツァーは元来社会主義は真に人間的な、他のすべての体制よりすぐれた社会を築くことを目標とするものであったのに、実際のDDRの歴史がそれを実現できず、「多くの人々に暴力を行使し、苦しみと不正を与えた」のはなぜかという問題に歴史家がまず第一に取り組むべきことを主張する。またバートシュテューブナーは資本主義から社会主義への移行が「歴史的に短い期間、未発展の諸条件、不十分な前提条件の下で」失敗したことを確認する。「実践を標識にすれば、現在(西ドイツの)社会的市場経済(soziale Marktwirtschaft)に対して進歩的な社会主義的対案は存在しない」、と。しかしDDRがいわゆる社会主義世界体制に組み込まれたのは、ソ連の圧倒的な影響力の下ではほかに道がなかったこと、そこに「DDRの全運命が決定的にかかっていた」<sup>(11)</sup>と。

- (1) 参照' Weber, S.1064.
- (2) Petzold, Gedanken eines Historikers, S.74.
- (3) 参照' Weber, S.1064.
- (4) 参照、仲井斌『もうひとつのドイツ』(朝日新聞社、一九八三年)、一一八―一二七頁。
- (5) 参照' Weber, S.1064.
- (6) Badstübner, Die Geschichtsschreibung über die DDR, S.489.
- (7) 参照' Weber, S.1065.

(8) 参照' ebenda, S.1068-1070.

(9) Ebenda, S.1066.

(10) Heitzer, Für eine radikale Erneuerung der Geschichtsschreibung über die DDR, S.506.

(11) Badstübner, Die Geschichtsschreibung über die DDR, S.481, 483, 486f.

## おわりに

旧DDRの歴史家たちは現在統一ドイツにおいて「生き残り」のために戦っている。もちろん個々の専門分野によって事情が異なり、例えば古代史・中世史の歴史家、あるいは経済史家は、近現代史の歴史家よりは「再就職」に有利だと言われている。最も厳しいのは、SED・DDRの歴史を専門とする歴史家である。しかし彼らにもSEDの宣伝という任務・束縛から解放され、自由に批判的に研究する道が開けている。またこれまでのDDR歴史学がすべて価値のない駄作だけを生産してきたわけでもない。SEDの「党派性」の束縛にもかかわらず、数多くの有用な研究成果が蓄積されていることは西側も認めている。とりわけマルクス主義歴史学の本領である批判的精神、特に資本主義・帝国主義批判は堅持すべき遺産である。

また旧西ドイツの歴史家にとっては、これまで利用できなかったDDRの文書館が利用可能になり、初めて資料に直接依拠した研究が可能になる。さらに東西の歴史家による共同研究も有望である。それはきわめ

て豊かな成果を生み出す可能性がある。必要なことは、学問研究に不可欠な批判的精神と複数主義の保証である。構造の改革、発想の転換、若手の歴史家の積極的参加などが実現された時にのみ、旧東ドイツ歴史学の転換は可能であり、「スターリン主義」の克服も可能となるだろう。

(一九九一・一・一・三〇成稿)

(弘前大学教育学部講師)